

新刊
紹介

『ミコワイ・レイ氏の鏡と動物園』

関口時正 (編/訳/著) (ポーランド文学古典叢書9) 未知谷 2021.11



西ヨーロッパにおけるルネサンスは3世紀にわたって(14~16世紀)花を咲かせた。しかしルネサンス文化はすべてのヨーロッパ諸国において同じ時期、同じ程度において発達したわけではない。イタリアではルネサンス文化の満開期が15世紀であったのに対してポーランドではこの新しい文化の最初の徴候が現われたのは16世紀前葉である。

そしてポーランド・ルネサンス文化の絶頂期はミコワイ・レイ(Mikołaj Rej, 1505~69)の『領主と村長と司祭、三者の間の短い会話』が出版された1543年である、と見なされている。この年はコペルニクスのラテン語で書かれた『天球の回転について』が出版された年でもある。16世紀はポーランド文明の「黄金の世紀」とよばれる。

この時代のポーランド文化に多大な影響を与えたものに三つの要因～人文主義、宗教改革、士族(シュラフタ)階級の政治活動～がある。ギリシャ・ラテンの古典古代に範をとる人文主義は文学に美の新しい理念をもたらして人間の尊厳と自由な生活の魅力を強調した。マルチン・ルター「九五箇条の論題」(1517)に端を発するプロテスタンティズムは、単に宗教活動にとどまらず、政治的・社会的運動と結びつき、国家の改革をもくろむ進歩的思想を生み出した。プロテスタンティズムの潮流は士族階級を巻き込んで、国政へと進出させた。ミコワイ・レイはこの三つの要因を具現した人物であり、時代精神の特異な文学的現象であった。

ポーランド文学の父

ポーランドのルネサンス文学においてはポーランド語とラテン語の二重使用が支配的であったが、イタリア風の人文主義の潮流の中にあつたレイは、母国語が古典古代の優れた文学の水準に達しうる芸術的表現手段であることを確信してポーランド語でのみ作品を書いた最初の作家であり、そのため「ポーランド文学の父」と称せられた。レイはプロテスタントであり、また士族階級に属し、国会の下院議員として政治に参入した。

本書は、レイの後期作品『鏡』と『動物園』に焦点を絞り、それらの作品の抄訳に解説を加えつつミコワイ・レイの人と文学の全体像を浮き彫りにした優れた研究であり、翻訳書というよりはむしろ関口時正氏の著作とみるべきであろう。

『鏡』(1568)は、聖書と古典文学からの引用をちりばめた自由な瞑想であるが、規模の大きな作品でそのうちの最も重要な部門は3巻からなる『真面目な人間の一生』の題で知られる。ある士族で荘園領主の青年時代・壮年時代・晩年の3期にわたる理想的人生を描いた作品。そのうちの一部(第2章第16節)が翻訳されている。四季の移り変わりに応じた田園の日常生活における家事、農事が歳時記風に生き生きと描かれており、たいへん興味深い。『鏡』は全体として人生の最終的な評価の試みであり、経験と観察の総括である。

『動物園』(1562)は670篇に及ぶ韻文による風刺詩からの抄訳。教皇、修道院、大聖堂、聖遺物、ポーランドの国家体制など、カトリック世界に対する痛烈な批判と皮肉をふくんだ風刺詩にはレイのプロテスタント精神が鮮明に表明されている。一方では、人間の「常変わらぬ心」をゆるぎない棕櫚の幹や柳の辛抱強い常緑に、「希望」を凜として立つ櫛の樹になぞらえた一連の寓意詩には「人間性」を尊重する作者の真情がにじみ出ている。

『動物園』からの「こぼれ話」としての『フィグリキ』は鋭い皮肉がコミカルに表現された「笑話」で面白い。「教皇の軍隊を率いて進軍する枢機卿」などは「神の代理人」を任じて他国を侵略する現代のどこかの国の独裁者に当てはまる風刺でもある。

(栗原成郎、東京大学名誉教授)

『ヤヌシュ・コルチャックの教育実践』

子どもの権利を保障する施設養育の模索 大澤亜里(著) 六花出版 2022.2

本書は、ポーランドのヤヌシュ・コルチャック(1878-1942)の社会的養育事業・施設での教育実践を主題にした歴史的事実研究である。従来我が国ではこの人物の子どもの権利条約成立史とのつながりから、その子ども観や子どもの権利に関する思想的アプローチが盛んな研究対象であったが、その思想の源泉としての教育実践の研究という立場から地道に研究発表を重ね、達成した成果である。

『地球の平和』

スタニスワフ・レム (著) 芝田文乃 (訳) 国書刊行会 2021.12

レムの最後から2番目のSF長編にして、泰平ヨンシリーズの掉尾を飾る作品がついに翻訳された。軍縮のために地球上の全ての兵器が月に移された。しかし、月では兵器が自動進化を遂げているらしい。その様子を確認すべく主人公は極秘に偵察に送りこまれる。ただし、普通の小説と異なるのは、泰平ヨンが月面で脳梁切断されてしまい、右脳と左脳が別々に判断するので、左半身が左脳に反抗するというスラップスティックな状況に置かれている点である。なんとややこしい。

機械の自動進化というモチーフは先に新訳された『インヴィンシブル』にも通じる。しかし、ユーモアには乏しい『インヴィンシブル』などの初期の本格的SFとは異なり、本作は諧謔やアクション、スリルに富んだドタバタ的な展開が目立つ。同時代にソ連で活躍したストルガツキイ兄弟も、初期の銜のないリアリズム的な作品から、中後期は風刺やユーモアに富んだ作風へと変遷した。

真の目的が明かされないまま、半ば巻き込まれるようにして主人公が任務に就くことを強いられ、最後に壮大などんでん返し待ち受けるという展開も、ストルガツキイ兄弟の後期の作品とよく似ている。思いもかけず分裂した自己という題材についても、人間が意のままになしうることがいっただけだけあるだろうかと思えば、付き合っていくかざるをえないものだ。本書の根底には人間のそうした現状をおおらかに肯定する態度があると思われる。

パンデミックと戦争

レムは全く予期していなかったことだが、軍縮というテーマと、パンデミックに似た最後の破局的な災厄について、2022年に生きる私たちは敏感に受け止めざるをえない。レムの故郷、リヴィウも爆撃を受けた。キーウの爆撃された現場について「写真を見るかぎり、エアコンの室外機やカーテンが見受けられず、このアパートは無人である。ロシア軍は民間人を攻撃していない」と私の知人のロシア人は

主張する。社会学の知見によれば、うわさやデマの本当の問題は情報の真偽ではなく、実は情報の解釈の次元にあるそうだ。泰平ヨンの友人タレントガ教授の「人は自分が信じたいことを信じる」という指摘は、全くその通りである。

小説の最後に唐突に明かされる破局について読者の受け止めはさまざまだろう。私たちの現実はどうか。2021年5月、新型コロナウイルスの感染が下火になるや否やイスラエルはガザ地区を空爆し、今年、パンデミックのさなかにもロシアはウクライナへの侵攻を始めた。ロシア外相ラヴロフは何の根拠もなく「ヒトラーにユダヤ人の血」と放言し、イスラエルのロシア系ユダヤ人は憤激した。かたやパレスチナのハマスは、同地では平和の調停者として振舞うロシアとの関係を保ち、今年5月にはモスクワを訪問した。

世界の現実複雑である。それにしても、パンデミックと戦争とどちらがマシなのか。この世界では、少なくともパンデミックは戦争を止められるほどの大破局ではないことが明らかになった。小説の最後の文章の通り、私たちはこれからも生き続けなければならない。では、われわれ人類の文明は生きるに値するほどの水準に達しているのだろうか。それは戦争を廃絶できるか否かにかかっているのだろう。

(宮風耕治、ロシアSF翻訳家)



『ミコワイ・レイ氏の鏡と動物園』

関口時正 (編/訳/著) 〈ポーランド文学古典叢書9〉未知谷 2021.11

本書は、著者の言葉を借りれば、ミコワイ・レイ (1505~69) についての「エッセイに加えて、レイのテキストをつまみ食いしながら、日本語に訳し、紹介した本」で、そのテキストの「選択もきわめて偏ったもの」(「あとがき」) になっているが、この〈偏ったつまみ食い〉が本書を「優れた研究書」(POLE106号12頁) にも、出色の〈作品〉にもしている。

全六章のうち第三~六章までは、それぞれ異なるレイの代表作を年代順に扱い、そこから章題を採っている。第三章『像』(1558)と第四章『動物園』(1562)は、どちらも長い原題を略称した〈青年が

古代の賢人たちと出会っていく物語〉と〈教訓的・風刺的なエピグラム集〉だ。第五章「フィグリキ、すなわち笑い話」は『動物園』の付録で、独自のタイトルページを備える小咄集だ。そして第六章「鏡に



映す『真面目な人間の一生』では、『鏡』(1568)と略称される大著の半分以上を占める『真面目な人間の一生』が〈ポーランド士族の理想像〉を描く。

これら四章では、レイの作品の断片の翻訳の前後を著者の解説と補足が、欄外の註ではなく地の文として続く。著者によると、レイは「実学的、実践的」知識に裏打ちされたポーランド語で「圧倒的な数の名詞」を並べ「リアリティをもって」「書く行為そのものを、ポーランド語自体を楽しんでいる」。そしてそこに活写される実際の「農事、家事を《楽しめ》《味わえ》」と興味深い人生観を説く。

そして第二章「ミコワイ・レイという人」では、作品からは知り得ないレイの性格や実生活が鮮やかに描き出される。例えば、その奔放さと鼻っ柱の強さから学校制度に収まり切らなかったレイ、だがいざ必要と見るやラテン語でも古典の素養でもさっさと身に着けてしまうレイ、凄まじい数の訴訟沙汰を物ともせず所有地を増やしていった遣り手の荘園領主レイ…。この章では、レイの親友アンジェイ・チェチェスキによる伝記(『鏡』の跋文)が抄訳されている。

第一章「言語と民族」こそ出色の「エッセイ」だ。著者はレイ自身の序文や後記等を引用しながら、「ポーランド文学の父」が高い〈民族的自意識〉と

〈国語意識〉を持っていたからこそポーランド語による文学を広めようと作品を書いたのだと論じる。ポーランド語が単なる〈ポーランドという土地で話されている言語〉ではなく、〈ポーランド人〉の〈国語〉として明確な民族意識と結びつく瞬間は、著者でなくても興味をそそられる。そしてその瞬間を、ポーランド国家の〈黄金の世紀〉にポーランド語でのみ作品を発表したレイに見出すのは、とても自然だろう。

生活や労働を楽しめ

本書表題の「鏡」と「動物園」は「ミコワイ・レイ」の代表作を指すが、では「氏」はどこから来たのか？ 添えられたポーランド語表題にも『...pana Mikołaja Reja』とある。著者は「あとがき」で『真面目な人間の一生』の男が「“殿”ではなく“氏”の顔を見せるのを垣間見た気がした」と説明する。もちろん、領主として依然「あれこれ指図する殿様」に変わりはないが、「生活や散策や労働を“楽しめ”と語る姿勢に近代的な個人が見えるような気がした」という。そして日本語の「氏」でもポーランド語の「pan」でも、敬称として人名に付くと、話者と相手との関係が無色透明ではなくなり、関口時正氏と「ミコワイ・レイ氏」との関係が具体的に浮かび上がる。著者はきつとレイや彼のテキストとの対話を、さらにそれを書き留める作業を、レイのように〈楽しんで〉いるのだろう。

(津田晃岐、聖ヨゼフ・カラサンス学園高等学校教員)

『第三共和国の誕生：ポーランド体制転換 一九八九年』

田口雅弘 (解説/訳) 〈ポーランド史叢書7〉群像社 2021.12

本書は1989年のポーランドにおける円卓会議に至るまでのプロセス、およびその後の状況について、主要な資料の翻訳とそれらに関する解説により、当時の状況を明確にすることを試みたものである。現在では当然のように考えられているいわゆる「体制転換」のプロセスについて、実はここにいたるまでにはさまざまな障害が存在していたこと、およびその障害を克服するには「僥倖」が存在していたことを明らかにする書籍である。

本書は、著者によるポーランドの体制転換の前後の状況に関する解説(第一章)と、当時の資料となる円卓会議合意書(第二章)、マゾヴィエツキ首相の国会演説(第三章)、およびバルツェロヴィチ・プランの概要(第四章)に関する翻訳の四章からなる。第二章以降の資料の翻訳に関しては、これらの資料がおそらく初めて日本語に翻訳されたという意味で、今後ポーランドの体制転換に関する歴史

ないし政治史研究者が(翻訳の不備などを指摘する可能性はあるが)参照すべき史料となることは間違いない。

第一章の解説に関しても、基本的には体制転換期のポーランドの状況に関してコンパクトな説明を行っているという点で、よくまとめられているといえる。円卓会議が通常の制度の枠外で実施されたこと、バルツェロヴィチ・プランが当初はポーランド経済にマイナスの影響を与えたことなどは、今の時点から振り返れば大きな問題ではなかった、という判断がなされるであろうが、当時このようなことが問題として取り上げられていた、という事実については、認識しておく必要がある。なぜ1989年に体制転換が生じたのか、ということについても一度考えてみたい方にとっては、必読の一冊となるであろう。

(仙石学、北大スラブ・ユーラシア研究センター教授)

